

# 經濟論叢

第129卷 第3号

---

哀 辭

故堀江英一名誉教授遺影および略歴

高年労働者対策に関する一考察……………	前 川 嘉 一	1
ファッション戦略, 組織間関係, 組織行動 および企業業績……………	赤 岡 功	15
ペルー海岸部アシエンダの近代化について……………	竹 内 勉	40
交換性回復と先物為替市場介入……………	羽 鳥 敬 彦	59
関一と大阪市営事業……………	関 野 満 夫	77
追 憶 文		
堀江英一先生の人柄と学問……………	後 藤 靖	97
工場から企業へ——堀江先生の晩年のお仕事…	下 谷 政 弘	103

---

昭和57年 3 月

京都大學經濟學會

## 追憶文

## 堀江英一先生の人柄と学問

後藤 靖

## 1

堀江英一先生は、1981年11月3日午前9時8分、肺水腫のためついに永眠された。68歳であった。

先生は、前年の12月中旬に持病となっていた前立腺肥大の悪化のため京大病院に入院されたが、「桜の咲く頃には退院できるそうだよ。退院したら早速“現代資本主義の企業理論”を完成するよ」と元気に語られていた姿が、いまでもあざやかに私の脳裡にやきついている。その退院はかない夢に終り、9月末頃には見た目にも体力の衰えがひどくなっていった。病巣が次第に全身をおかしていく様が、素人目にもはっきり認められるほどであった。先生は、最後の気力をふりしぼられるかのように、歩行器にたよりながらも、フロアを一周することを自らに義務づけられ、見舞にうかがう度に“企業理論”の構想を語られた。何とか回復されてほしいという強い願いと同時に、次第に悪化していく容体を目の前にして、もう駄目ではないかという絶望感にとらわれながら、先生の学問への執念を聞かされる私は、何ともやりきれない心境に立たされていた。

思えば、先生は私にとっては三十五年米の恩師であり、私を日本近代史研究に導き入れてくれた人であった。その指導の仕方はあくまでもきびしかった。だが、同時にまた、心の底から温く包容してくれる人であった。だから先生のもとには、経済学部でなく、文学部や法学部あるいは農経の学生たちも多く訪れ、その指導を仰いでいた。多くのすぐれた人材が輩出し、今日では大企業のトップに位置する人も多数存在し、また戦後の歴史学界の中ではいつしか「堀江山脈」とよばれるものが出来上っていた。日本史の領域でいえば大槻弘（大経大）、内藤正中（島根大）、中村哲（京大）、松尾尊兌（京大文）、池田敬正（京都府大）、脇田修（阪大）、芝原拓自（名市大）、酒井一（竜谷大）、木坂順一郎（同）、大江志乃夫（茨城大）などが、西洋史では尾崎芳治（京大）、松村幸一（大経大）、武暢夫（富山大）など、そして現状分析では前川恭一（同大）、坂

本和一（立命大）、塩見治人（名市大）、下谷政弘（京大）等々、それぞれの研究領域で第一線に立っている人々である。先生は、これらの諸君を手とり足とりし、時には齒に衣をきせず怒鳴りながら、自分の研究時間すら犠牲にするほどの熱の入れ方で指導され、育て上げられた。

その師は、もう再び還らない。痛恨の極みである。いまは、ただ、先生の御冥福を御祈りするのみである。

## 2

堀江英一<sup>\*</sup>といっても、今日の学生諸君には、おそらくどんな仕事をした学者だったのか、すぐには思い浮ばないのではないかと思われる。先生の晩年の仕事については下谷助教授が紹介してくれているので、私は先生の明治維新史研究のことについて簡単にふれさせていただくことにしよう。

幕末・維新期の研究史において先生の地位を確固不動のものにしたのは、名著『明治維新の社会構造』（1954年9月、有斐閣刊。『著作集』第一巻所収、青木書店刊）である。だが、この名著が生まれるまでには、『近代産業史研究』（1948年、日本評論社刊。『著作集』第二巻、所収）から『封建社会における資本の存在形態』（1949年、日本評論社刊。『著作集』第二巻所収）、『日本のマニファクチュア問題』（同年、三一書房刊。『著作集』第二巻所収）および『西洋経済史』（1950年、三笠書房刊。『著作集』第三巻所収）にいたる苦闘の歴史がある。私は、この苦闘の時代に先生の門を叩いただけに、その苦闘の裏側まで熟知しているただ一人の門弟である。だが、ここではその裏側まで立ち入って述べる余裕はないので、『近代産業史研究』から『明治維新の社会構造』にいたる、新しい理論の形成史の表面だけを触れるにとどめよう。

(1)さて、『近代産業史研究』は、1940年から47年にかけて発表された7つの論文にいくらかの手を加えられた、先生の最初の著書である。その7つの論文は、主として幕末・維新期の絹織物業の生産構造と市場構造の分析であった。そのねらいは、当時の幕末・維新期の経済発展段階についての二つの支配的見解——服部之総氏の「幕末＝敵愾な意味でのマニファクチュア時代」説と、土屋喬雄氏の間屋制家内工業段階説——にたいする批判にあった。服部氏の「敵マニユ」説は、19世紀末にアジアの諸国が先進資本主義列強によって次々に植民地化・半植民地化されていったのに、日本だけが独立を維持

し、急速に資本主義国として発展した経済的要因として、幕末期にすでにマニユファクチュアが広汎に形成されていたからだとしたことであった。服部氏のこの問題提起をうけて、多くの人達が幕末期でのマニユファクチュア研究に精力をかたむけた。ファシズムの支配下において学問研究の自由が極度に奪い去られていた中で、マルクスのマの字も使わずに、先生はマルクスの理論をひそかに駆使しながら、服部氏の問題提起を具体的・実証的分析によって基礎づけようとしたのである。ところが、西陣、桐生、足利、北陸、丹後の絹業の分析を進めれば進めるほど、マルクスや服部氏のいうマニユファクチュア経営は見出せず、かえって商業・高利貸資本による資本制的家内労働＝分散的マニユファクチュア経営の存在が主流であることが実証された。上記7編の諸稿は、こうして「服部＝散マニユ論」に対する「堀江＝分散マニユ論」の新提起となったわけである。この堀江説は、戦時中の幕末経済史研究のなかに新しい光明を投げかけ、幕末史研究の水準を大きく引き上げる礎石をきづいた。

(2)だが、分散マニユ論は、服部説の修正ではあっても、そこからの完全な脱脚ではなかった。そのことは、先生自身が『近代産業史研究』の「はしがき」で「分散マニユ論は空花にしかすぎなかった」と書かれ、その後に発表された諸論文の中でもしばしば自己批判されているところである。

『近代産業史研究』は、私が三回生になったときに出版され、私はその本を先生にいただいた。早速に読みはじめて、その「空花」という語が奇異に感じられ、先生にこれはどういう意味ですかとしつこく訊ねたことを思い出す。その前年に助教授になられ、1948年からはじめて西洋経済史の講義を担当された。私は小野一郎教授らと社会科学研究会を組織して、『資本論』研究会と『ロシアにおける資本主義』研究会を聞いていたが、私が後者の責任者となり、先生を囲んで十数名が夜遅くまで取り組んでいた。その諸君とともに、先生の講義にはアルバイトを休んでも出席した。その講義が進むうちに、わたしはやっと「空花」の意味がわかった。

その第一は、イギリスのチューダー絶対王政は、イギリスの経済発展がマニユファクチュア時代に到達した16世紀中葉よりはるか以前の1485年に成立しており、フランスその他の国においても同様な事態がみられる。そうだとすれば、天皇制絶対主義の成立も服部説のようにマニユファクチュア時代と結びつけて考える必要は毛頭ないということ。第二に、絶対王政がマニユ以前の経済段階において成立するとすれば、レーニンのいう

小営業段階であり、その小営業段階こそ各国における封建制の末期＝封建制の危機を醸成する経済段階として意味づけることができる、ということであった。

『資本論』と『発展』の徹底した読み込みが、分散マニユ論を空花として葬り去り、小営業段階論を展開させることになった。そのさい、いま一つの重要な提言は、絶対王政は資本の本源的蓄積をおし進めはするが決して完遂はせず、その完遂はブルジョア革命＝ブルジョア国家によってはじめて行われるという、原蓄二段階＝二類型論であり、これは今日でも通説として定着している。この提言は、「本源的蓄積過程における国家権力の問題」(1948年8月『季刊社会科学』第1集、『著作集』第三巻所収)においてなされたものである。

その小営業段階論が積極的に展開されたのは、『封建社会における資本の存在形態』と『日本のマニユファクチュア問題』の二著においてである。先生は、マルクスやレーニンが『資本論』と『発展』で資本主義の工業の端緒としての協業はマニユ時代のような歴史的一段階を画するものではないと規定したのを、より理論的に深められた。その深め方は、レーニンが工業部門での小営業論を論じたものを、小営業を開展させるにいたった小農業の構造変化と接合させ、封建社会における農工の未分離的結合が生産力の発展に伴って農民的商品経済の展開をもたらし、それが封建的生産様式に対抗し、封建社会を危機に追い込むという歴史理論につくりかえるということであった。この新しい歴史理論をつくり出し、それにもとづいて日本の幕末・維新期の史実を実証された。空花とされた分散マニユ論はそれによって止揚されたばかりでなく、それまで研究者をやませつづけてきた幕末敵マニユ論や問屋制家内工業段階論を理論的、実証的に葬り去った。その実証の過程で、国内市場の形成にともなって、それへの編入のされ方が東北、西南、中央の三地帯でそれぞれに異なることを明らかにし、西南地帯の国内市場への編入のされ方の特異性が維新変革の起動力となり、中央地帯が民権運動の地盤になることを基礎づけられた。これらの指摘は、それ以後の研究の発展の礎石ともなったものである。

ところが、この二著は、経済構造からストレートに明治維新という政治的変革を説明するという基底還元論の欠陥もっていた。人々は、その小営業段階論には従いながらも、この基底還元論には多くの批判を投げかけた。

それらの批判に耳を傾けながら、この基底還元論を自らどう克服すべきかということ

で、先生の新しい苦闘がはじまった。1952年の夏ごろから、出口勇蔵先生やその門下の人々—平井俊彦教授、田中真晴教授（甲南大）らと堀江門下との合同での『レーニン2巻選集』や『毛沢東選集』の輪読会が始められ、またこれに参加した人々によってドツブの『資本主義発展の研究』の翻訳も同時に進められた。こうした研究会の組織の中心は、いうまでもなく先生であった。レーニンの輪読会のなかで、先生は経済過程と政治過程とをどのように統一的に把握すべきかを中心におかれた。名著『明治維新の社会構造』への構想が、こうして次第に形成されていくのである。

(3) 幕末・維新期の経済的・政治的・社会的な複雑な変革の過程を統一的に明らかにしようとしたのが、『明治維新の社会構造』である。

その統一的把握のための論理として、経済構造と政治過程との媒介環に階級関係の変化と階級闘争論がもち込まれた。

幕藩体制下の基本的階級矛盾（封建領主階級と村役人をも含む農民層）と従属的・副次的階級矛盾（村役人＝地主・商業高利貸資本家と一般耕作農民）を明らかにし、基本的階級闘争は惣百姓一揆であり、その基底には農民的商品経済の発展につれて「民富」＝小営業が展開し、事実上の農民的土地所有の形成というブルジョア的発展が幕藩体制の基本矛盾を激化させ、幕藩体制を解体においこんだ。明治維新はこの基本矛盾を何とか解消しようとした絶対王権であり、「村落支配者層（＝寄生地主階級）が政治的支配階級となる」過程にほかならず、「ブルジョア的発展の未成熟な農民的土地所有（民富）＝小営業）を決定的に分化させて、半封建的土地所有者である寄生地主＝マニファクチュアと小作人＝プロレタリアートとの対抗関係を確立」した変革であった。だから「端的にいえば、明治維新は徳川幕藩体制のもとでの被支配者であった村落支配者層が旧来の支配者である武士階級とりわけ幕藩領主を排除して新しく支配階級に登場する政治過程である。明治維新时期は、したがって、村落支配者層が幕藩体制打倒に政治的に登場してから、かれらが政治的支配階級になるまでの期間であり、大体天保八年の大塩の乱から明治十七年秋父事件までの、ほぼ五十年間である」と結論づけられた。

今日の明治維新と絶対主義天皇制研究の段階からみれば、理論的にも実証的にも必ずしも首肯できない結論である。しかしながら、今日の研究の発展は本書を土台にすることによってはじめて生まれえたことも事実である。とりわけ、幕藩体制の経済的基礎過程の研究の発展は、本書なしには到底ありえなかった。今日、本書が幕末・維新史研究

での名著とされ、古典的労作の一つにあげられるのは敢なしとしない。

(4) 先生の研究は、その後ば全く理論問題に進んだ。『市民革命の理論』(1957年)から『経済学から歴史学へ』(同年)および『産業資本主義の構造理論』(1960年、『著作集』第4巻所収)へと。これらの著作に一貫しているのは、『資本論』と『発展』とを接合しながら、『資本論』の抽象的な理論を特殊・具体的な資本主義社会の経済構造の分析のための理論に組みかえるという、前人未踏の意欲にみちている。それは、単に抽象的な理論構成をめざされたものではなかった。歴史研究からより現代の問題を解明するためのものであった。その問題意識が、下谷助教授が紹介された研究領域に接続していくのである。

### 3

先生の問題関心は目まぐるしいほど変化している。歴史研究から現代企業の分析へと  
いう風にある。現代の問題への関心の深まりは60年安保をきっかけとしている。そこ  
には、学問は現代の問題に応えるべきだという強烈な思いがこめられていた。

先生は、つねに「現実から学び、現代を変革する学問体系をつくれ」といつづけられた。実際、先生の仕事は机の上だけではなく、農村や工場をこまめに歩き、農民や労働者と対話しながら生きた現実から新しい理論を作り上げるという作風であった。『現代資本主義の企業理論』は、分散マニユ論にはじまる自らの研究史の総括として位置づけられていた。

病魔は、その念願を空しくうちくだいた。それがもし天命であるというのであれば、私は天命というものの非情さ、残酷さをうらまずにはおれない。

先生を失ったいま、唯一の救いは『堀江英一著作集』全四巻を刊行できたことである。そのとき、先生が「有難とう。学者冥利につきるよ」といって私の手を握られた温顔が、私には忘れられない思い出としていつまでも甦えてくる。

先生、永い間ありがとうございました。どうか安らかに御眠り下さい。